

# 鉢叩の装いと鉢叩の装い 暗鑑の品叩せし形

澤田和人

The Costume of Hachi-tataki and That of Kane-tataki: Symbolism and Shape of Clothes

はじめに

- ①鉢叩の装いと鉢叩の装い
- ②十徳と直権との関係性

おわりに

## [縦文欄題]

鉢叩と鉢叩とはしばしば相似した存在として議論されてきた。本稿は服飾史の立場からこのように扱われてきた鉢叩と鉢叩に注目し、彼らの装いとそこから発せられる問題について論ずるものである。

鉢叩の纏う服飾は、十徳をもととして展開していくことが観察される。「壬生地蔵縁起」（京都・壬生寺蔵、一四世紀後期～一五世紀前期成立）などに見る鉢叩は、典型的性をとどめる十徳を着用している。それが、歴博甲本「洛中洛外圖屏風」（国立歴史民俗博物館蔵、一五二五～三五年頃成立）を先駆として、以降の絵画に見る鉢叩は、十徳と外形を同じくするが、十徳を特徴づけるものとは異なる文様を施した服飾を着用することになっている。すなわち、十徳に独自性を加味して、十徳から分化していく過程が辿られるのである。一方、鉢叩の纏う服飾は、基本的には直権であった。同等視されてきた鉢叩と鉢叩とは、十徳と直権という異なる服飾を着用していたこと

とが判明する。今日の眼には、十徳と直権とは全く違ったもののように映るであろう。しかしながら、当時どちらの服飾も記号として「日常社会の枠組みの外にある」という意味内容を有しており、この点では非常に近似していた服飾であったと言える。

そして、衣材・仕立・着装法の史的展開の検討によって、外見を全く異にしていた十徳と直権とが、近似した外見を得ていく経過が辿られる。このような動向が起こり得たのは、そもそも両者の有する記号性の近似に大きく負っている。それは服飾という「もの」の造形を考える上で、記号としての役割は見過しえない。それは、造形をかたちづくる諸要素の選択と、記号として表出する意味内容とは不可分の関係にあると考えられるためである。従って、記号は、複雑な様相を呈する服飾の歴史に対して、理解を深めたり、ひもといだりする鍵となる場合もある。本稿はそうした実験的検討を試みたものである。